LAC法に取り組むよう助言した。そこで作成したLAC図がFig.1である。五年生の一～三月までは、生活を規則的にし、卒論作成の計画。卒業するための科目64単位をとるための計画。就職準備などLAC法によって計画、実践した。六年目は、全力で単位をとり無事卒業。就職は、中央競馬会は面接で留年動機を厳しく批判され不合格。第二志望のスポーツ新聞社も不合格。第三志望の地方公務員試験には合格した。（本事例は本人の了解で掲載）

5. LAC法の効果

LAC法は、無気力、無意欲な生徒や学生・社会人を対象にした意欲への脱出法のカウンセリング技法である。筆者は、本来退学しそうな学生で、来談した多くの学生に、LAC法を適用し、学習意欲を向上させ、卒業・就職可能にしている。本事例はその一つである。

本法は、来談者中心のカウンセリング、行動療法、精神分析法などと類似点もあるが、差異点もある。相談所では、現在を重視し、悩みに対する具体的な指針を与え、手続きもわかりやすく、取り組みやすい一種の短期行動療法である。

筆者は、十数回中国心理学生相談学会から招かれて、本法の指導も行っており、中国の大学生に対象に広く用いられている。また、タイ・台湾などでも活用されている。わが国は毎年LAC法研究会を実施して、研究に努めている。

なお、LAC法に限界がある。対象は中学生以上成人であり、特に、無気力・無意欲・無目標な人に目標を与え、計画的意欲的に生きる力を与えるカウンセリング技法である。そして、個人でも集団でも実施できる。しかし、来談してLAC図を作成しない人は不向きである。

カウンセリングの理論や技法のほとんどが欧米からの移入であり、日本で開発されたのは、森田療法と内観法だけである。筆者は、この新しい理論・技法をさらに発展させたいと思い、研究継続中である。

平成13年
©1月24日

ラフカディオ・ハーンの足跡
－流浪の人生と日本発見－

大島芳樹

英国人でありながら日本の風物、宗教、伝説、習俗などに興味を抱き、それらを著作に表わしたラフカディオ・ハーン（1850－1904）すなわち小泉八雲は、決して平穏でなく、むしろ波乱多い生活を歩んだ人だった。彼の父はアイルランド出身の軍医であり、ギリシャに滞在していたとき、現地の女性と結ばれて、そこで誕生したのがラフカディオである。彼は翌年には父の故郷に移住するが、そこで両親は間もなく離婚し、彼は大叡母の手で育てられる。英語と仏国の大学校で学んだが、大叡母の破産が原因で自給を余儀なくされ、十九歳にして単身米国に渡る。彼は文章を書く能力があったため、シンシナティ、ニューオーリンズ、ニューヨーク、フィラデルフィア、と各地を転々としながら新聞や雑誌の記事を書いた。またフランス語ができたので翻訳をするかたわら小説も書きそれらを出版した。彼はニューヨークにいるとき仏領西印度のマルティニークに行くことがある。そこでは土着民の宗教、伝説、習慣などに興味を持ちそれらを記述して出版したが、この古来の文化に結びつける姿勢は後の日本での記述に共通しており興味深いものがある。

1890年四十歳のときハーンは日本に向けて出発する。これは出版社の依頼で日本の文化や日本人の生活について書くためであった。しかし日本について間もなく彼はこの仕事の条件が悪いことか
ら立腹し、出版社に絶縁状を書いて送付した。このため彼は生活を支える収入の道を失ったことになったが、そこで紹介されたのが島根県松江市の松江中学校の英語教師であった。松江は古来の文化の中で生きる純朴な市民の住む所で、彼はとても気に入りその生活に馴染んでいった。当時日本に来る外国人は、自国の文化の優越性を意識するあまり上着の文化を考察して評価する姿勢に欠けていたが、ハーンは全く違って松江の風物、習慣、習俗を愛し、それらを流麗な英文によるエッセイを書いた。そして小泉せつと結婚すると、彼女は執筆に大いに協力し、数多くの随筆、小説、評論を書くことができた。しかし松江の気候は冬の間は厳しく、熊本第五高等学校の教師に招聘されたので転任した。だが熊本での生活は彼にとって好ましいものではなかった。それは多くの授業の担当と会合の出席が負担となり、執筆の時間がとれないからであった。それに熊本の風土や住民の気質が、松江のものと違っていたことも原因していった。

1894年彼は神戸の新聞社「神戸クロニクル」の記者に招聘され住居を移した。そして翌年帰化の手続きをとり小泉八雲と名乗った。だが神戸は近代的な都市でそこに住む外人の多くはプライドを強く持ち日本人を蔑視していて、ここもハーンの好みに合った場所ではなかった。そして二年後1896年に東京大学文学部講師に招聘され「英文学史」や「詩論」など英米文学の講義を担当した。

住居は初めは市ヶ谷の富久町におかれていたが、のち新宿の西大久保にあった古い邸宅を買いそれを増改築して住んだ。東京大学では六年教授を執り退職した。この退職には大学当局との誤解からトラブルが生じたが、彼は潔く退職翌年早稲田大学文学部講師となった。そして間もなく自宅で心臓疾患から倒れ急逝した。

ギリシャ生れのハーンはアイルランドで育ち、アメリカで苦労しつつも修業を積み、日本に来て偶然のことから住みつき、日本及び日本文化を紹介する著作を次々と発表した。彼の生涯は計画に基づいて運ばれたのでなく、むしろ偶然が作用してそれが方向を決定したといえる。彼には未知の国や遠い昔に憧れを持つ傾向があった。彼のギリシャで生れ各地を転々として流浪の人生は、彼の憧れが導いたといえるかも知れない。

平成23年
◎1月24日

定家と正微
－草根和歌集を読む－

白井忠功

藤原定家（応保二年一一六二－仁治二年一二四一）は、勧進第三代『新古今和歌集』の中核的な存在で、当時の歌壇を代表する歌人であった。和歌文学を芸術至上主義、唯美的な世界を高揚した。有心軒を提唱し、妖艶余情の美学理念を樹立した。その代表和歌は、／春の夜の夢の浮橋とたえして蜂に別るゝ横雲の空／である。新古今集の中の最高傑作である。彼が歌論書『近代秀歌』で「ことばはふるきをしたひ、心はあたらしきを求める、をぼせたかきすかたをねがひて」と主張した。これを後世の歌人たちが示標として継承したのである。

その一人に正微（永徳元年一三八一－長禄三年一一四五九）がいた。室町初期の代表的な歌人である。彼は定家を理想としたばかりか、『正微物語』のなかで「此道にて定家をなみせん輩は、冥加も有るべからず、罰をかふるべき事也」と書いた。続いて「叶はぬまでも、定家の風骨をうらやみ学ぶべしと存じ待る也。（中略）いかにもその風骨心づかひを学ぶべき也」と定家の風骨・精神を学びたいという、定家尊に心酔したのであり、「寝覚などに定家の歌を思い出しぬれば、物狂ひ scèneる心地し待る也」という熱狂的なまでの定家